

生命科学 研究科は

今

2025
Vol.19

東北大学大学院
生命科学研究科

Graduate School of Life Sciences,
TOHOKU UNIVERSITY

東北大学大学院 生命科学研究科

紙面の制約から、ここにお知らせしたのは
生命科学研究科に関するほんの一部の情報です。
詳しくは生命科学研究科ホームページ
<https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/>をご覧ください。
2025年5月発行



東北大学「生命科学教育研究支援基金」へ
ご協力をお願い
[https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/
outline/donation/](https://www.lifesci.tohoku.ac.jp/outline/donation/)



浅虫海洋生物学教育研究センターで創立百周年記念行事が行われました

生命科学研究所附属浅虫海洋生物学教育研究センターは2024年7月に創立百周年を迎えました。1924年(大正13年)7月に「東北帝国大学理学部附属浅虫臨海実験所」として開設された当センターは、現在まで一貫して海洋生物学の教育研究の場として活動してきました。創立当時、国内外の研究者が自由に使い、水族館を併設する施設は前衛的でした。その背景には、大学という垣根を超えた門戸開放と学問の普及を当施設の使命とする畑井新喜司初代所長の考えがありました。この地域、国内外にいたる様々なスケール、様々な立場の方を対象として研究・知識・人材の発展と育成を見据える精神は現在も引き継がれています。実際に、当センターはこれまでたくさんの国内外の研究者、学生、地域の方々に利用され、多くの研究成果と人材を輩出してきました。

6月15日に開催した記念行事には、このような当センターの歴史を反映するように様々な形でセンターにつながりを持つ方が集まりました。地域の方々に加え、東北大学教員、センターの元教職員や卒業生、センターの現在と過去の利用者が、海外及び全国各地より訪れました。参加者数は、施設案内に約100名、講演会に約130名におよび、運営側の想定を大きく上回るものでした。また、同時に開催された資料展示(8日～19日)には、約220名の方がセンターを訪れました。講演会では、浅虫の町とセンターのかかわりや、センターで行われてきた研究についての歴史を振り返りました。懇親会では、様々な年代のセンター関係者が旧交を温め、新しいつながりを作り、彦坂生命科学研究所長による次の百年に向けた期待の言葉で締めくくられました。

創立百周年行事を通じて、当センターがいかに多くの方に支えられてきたかを実感し、受け継がれてきたバトンの重みを実感しました。近年、劇的に変化する海洋環境において、地域の養殖から生物多様性の危機まで、海洋生物を取り巻く課題はいつそう深刻となっています。このような状況の中、海洋生物の教育研究施設の重要性、向けられる期待は前の百年を上回るでしょう。先人の熱意と成果に敬意を示すとともに、研究・教育活動の益々の発展と地域貢献に尽力していく所存です。



満員の講演会場



施設案内の様子



センターでの資料展示

ネイチャーポジティブ発展社会実現拠点が本格型に昇格しました

拠点の概要

自然と生物多様性は、人間活動により危機に直面しています。今私たちは、自然の劣化を伴う持続不可能な社会から、自然を回復させて発展する持続可能社会へ大きく舵を切る必要に迫られています。2030年までに自然の劣化を回復基調に転じるための「ネイチャーポジティブ」という考え方はサステナブルな社会を目指すための目標の1つです。

私たちネイチャーポジティブ発展社会実現拠点(以下NP拠点)は、誰もが生物多様性の価値を認め、自然の恩恵を持続的に享受し、そして自然と社会が共に発展するための行動に誇りを持って選択できる自然調和社会、すなわちネイチャーポジティブ発展社会の実現というビジョンを掲げて活動しています。そのためには、自然の状態を把握できるインフラ作りや生物多様性課題を解決するためのネイチャーポジティブな産業の成長を促進し、あらゆる地域で人々や企業がネイチャーポジティブな行動を選択できるような環境を作っていくことが大事です。

拠点では、「自然の価値を見える化し持続的に高める」「ネイチャーポジティブに向けてお金が流れる仕組みを作る」「ネイチャーポジティブ発展社会を支える人を育てる」という3つのターゲットを掲げて、26もの企業や教育・研究機関と連携。産官学が一体となって、私たちのビジョンの達成に向けた研究開発に取り組んでいます。



本格型に昇格し、キックオフシンポジウムを開催しました

NP拠点は、様々な社会課題の解決を目指した共創の場を生み出すための「共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)」に採択されて活動している拠点の1つです。2024年4月には、育成期間であった育成型から本格型の拠点へと昇格が決まりました。

10年間の長い活動に取り組む本格型の昇格にあたり、2024年6月12日にキックオフシンポジウムを実施しました。現地参加とオンラインを合わせると約400名もの方々にご参加いただいたこのシンポジウムでは、拠点に参画する研究者や企業だけでなく、環境省などの官公庁にもご登壇いただき、ネイチャーポジティブに関わる最新の動向やNP拠点のビジョンが共有されました。NP拠点はより多くのネイチャーポジティブに関わるステークホルダーの皆さんと共に、共創の場として機能しながらビジョンの達成を目指していきます。



研究トピック

小鳥はさえずりの内容を目的に応じて柔軟に変えられる
さえずり中の音をテキスト化するプログラム開発によって判明

一般に小鳥と称されるスズメ目の鳴禽類は、音をつなぎ合わせた音声シーケンスである「さえずり」を用いて、他個体に情報を伝えます。しかし、鳴禽類が意図的に音の並びを変えられるのかどうかは不明でした。脳機能発達分野の河路琢図大学院生、安部健太郎教授らのグループは鳴禽類の発声内容を迅速にテキスト化するコンピュータープログラムを開発し、これに応用したフィードバック実験を実施しました。その結果、鳴禽類は目的指向的に発声内容の迅速かつ柔軟な変更できることが証明されました。本研究は、動物コミュニケーション機構に関する新たな発見で、言語情報の脳内処理機構の生物学的基盤を解明する上で重要な知見を提供します。

Kawaji T. et al. (2024) Goal-directed and flexible modulation of syllable sequence within birdsong. *Nature communications*
DOI: 10.1038/s41467-024-47824-1

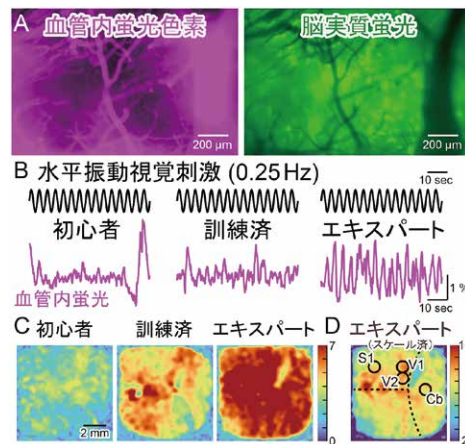


本研究ではジュウシマツが発する音声の内容を迅速に解読し、内容に応じて他の個体の動画を液晶モニターに提示するという実験を行いました。

脳血管「バントレ」で脳機能拡張 視覚刺激で鍛える脳内血管運動トレーニング

脳内の血管は、数秒に1度の周期で自発的に拡張と収縮を繰り返す「血管運動（バソモーション）」を起こすことがあります。超回路脳機能分野の佐々木大地院生(当時)と松井広教授らのグループは、マウスの脳内血管運動を観察する方法を開発しました。その手法を用いて、水平方向に行き来する縦縞模様をマウスに提示したところ、最初は脳血管運動があまり見られなかったものの、次第に視覚刺激に完全に同期し、脳全体の血管が拡張・収縮を繰り返すことが明らかになりました。このように、血管運動を効果的に誘導する「バソモーショントレーニング(バントレ)」は、脳の高次機能を拡張したり、脳病態治療に応用したりできる可能性が示唆されました。

Sasaki D. et al. (2024) Plastic vasomotion entrainment. *eLife*
DOI: 10.7554/eLife.93721.3

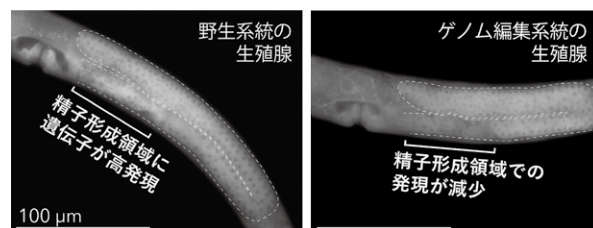


水平振動視覚刺激によって誘導される血管運動は、トレーニングとともに増幅し、全脳で同調することが示された。

雌雄同体生物が進化したメカニズムに迫る
タンパク質にならない非コード領域の「急速な進化」が関与

動物には雌雄異体だけでなく「雌雄同体」の種も多く存在しており、線虫の仲間では複数の種で雌雄異体から雌雄同体への進化が観察されています。しかし、雌雄同体がどのように進化したのかは明らかになっていませんでした。玉川克典研究員、牧野能士教授、杉本亜砂子教授らの研究グループは、複数の雌雄同体種で急速に進化したゲノム中の非コード保存領域(CNE)を網羅的に特定しました。そして、雌雄異体種のCNEを雌雄同体種のゲノムに組み込むことで、精子形成に関わる近傍遺伝子の発現量を減少させることに成功しました。本研究は、雌雄同体の進化メカニズムの解明や、ゲノム中の非コード領域が進化に与える影響の解明に繋がると期待されます。

Tamagawa K. et al. (2024) Evolutionary changes of non-coding elements associated with transition of sexual mode in *Caenorhabditis nematodes*. *Science Advances*
DOI: 10.1126/sciadv.adn9913



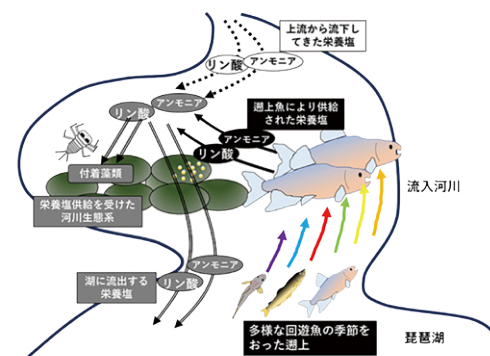
ゲノム編集により非コード保存領域を改変し、近傍の精子形成遺伝子の発現量を低下させることに成功した。

多様な魚の遡上が川の生態系を支えている 回遊魚の「おしっこ」は川の生物の大切な栄養源

海や湖にそそぐ自然のつながりの保たれた川には、海や湖からさまざまな回遊魚が産卵などの為に遡上してきます。これら多様な回遊魚の存在は川の生態系にどのように影響しているのでしょうか？

本研究では、琵琶湖から遡上する多様な回遊魚が排泄する「おしっこ」が、一次生産者の生育に不可欠なリンや窒素などの栄養塩を河川生態系に供給することで河川の生物群集を支えていること、多様な魚種が季節を追って順に遡上することで年間8か月もの間その効果が持続することを明らかにしました。この成果は自然の生態系のつながりおよび大移動する動物の存在とその多様性が生態系全体に果たす役割の重要性について新たな側面を明らかにしたものであり、自然環境の管理と保全に重要な示唆を与えます。

Kurasawa A. et al. (2024) Sequential migrations of diverse fish community provide seasonally prolonged and stable nutrient inputs to a river. *Science Advances*
DOI: 10.1126/sciadv.adq0945



多様な回遊魚の遡上が琵琶湖から流入河川に安定的・長期的に栄養塩を供給し、藻類や底生生物に取込まれた。

5億年前から使われてきた植物の幹細胞性を制御する仕組みを解明
最小の分裂組織をもつコケ植物から明らかになった幹細胞維持システム

ヒメツリガネコケの分裂組織の構造(上段)と、幹細胞と非幹細胞の作り分けを制御する仕組み(下段)。

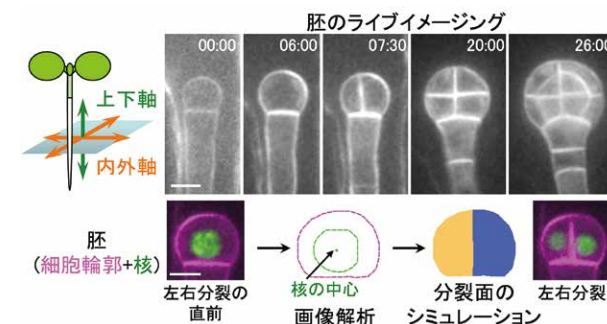
植物は茎の先端の分裂組織に様々な種類の組織を生み出す幹細胞を持ち、これにより枝を伸ばして旺盛に繁茂します。しかし幹細胞としての性質がどのように決定されているのかはまだよくわかっていません。ただ一つの幹細胞をもつ原始的でシンプルなコケ植物の分裂組織に着目したところ、植物ホルモンであるサイトカイニンが幹細胞因子として、PpTAWタンパク質が葉などの組織への分化促進因子として働き、1細胞レベルでの幹細胞と非幹細胞の作り分けを制御していることを発見しました。これらの因子は被子植物でも保存されており、コケ植物と維管束植物の系統が分かれる5億年前から使われてきた幹細胞制御因子であると考えられます。

Hata Y. et al. (2024) Cytokinin and ALOX proteins regulate pluripotent stem cell identity in the moss *Physcomitrium patens*. *Science Advances*
DOI: 10.1126/sciadv.adq6082

植物の「内と外」を最初にする仕組みを発見 ～細胞はかたちを少し変えることで分裂の方向を決めている～

植物の基本的な構造は、茎や根のような円筒型です。内側と外側を繋ぐ平面的な内外軸をもつことが、植物のかたち作りにとって重要です。しかし、いつ・どのように内外軸が作られ始めるかは長年の謎でした。本研究は、モデル植物のシロイヌナズナにおいて、胚の最外層で働く遺伝子群を壊すと、内外軸がうまく作れなくなることを見出しました。また、受精卵から胚が次第に作られていく様子を、ライブイメージングによって追跡し、細胞のかたちと核の位置によって、数学的に最も安定な場所に分裂面が作られることを突き止めました。この研究によって、細胞のかたちや核の位置という幾何学的な情報をわずかに変化させるだけで分裂方向が決まるという、精緻な戦略が明らかになりました。

Tanaka S. et al. (2024) HD-ZIP IV genes are essential for embryo initial cell polarization and the radial axis formation in *Arabidopsis*. *Current Biology*
DOI: 10.1016/j.cub.2024.08.038



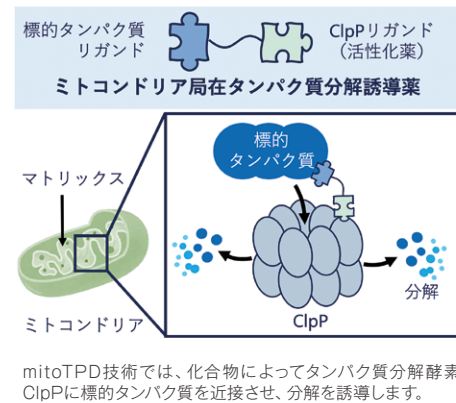
植物の内外軸が作られる過程の観察とシミュレーションによって、分裂方向を決めるルールが分かりました。

研究トピック

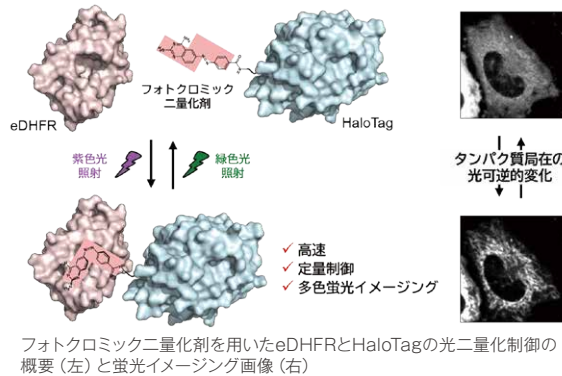
ミトコンドリア局在タンパク質の分解誘導技術mitoTPDを開発
新しい創薬方法論やミトコンドリア研究技術への展開に期待

化合物を用いて任意のタンパク質を分解へと導く技術targeted protein degradation (TPD)が新しい創薬手法として注目されています。活性分子動態分野の友重秀介助教、石川稔教授らのグループは、近年注目されているミトコンドリア創薬のための新しいTPD技術として、ミトコンドリア局在タンパク質を標的とする技術「mitoTPD」を開発しました。ミトコンドリアを断片化するタンパク質をミトコンドリアに過剰発現させた細胞に本技術を用いることで、ミトコンドリア形態の正常化にも成功しました。これは、本技術のミトコンドリアの操作やミトコンドリア異常の回復への活用可能性を示しており、新たなミトコンドリア創薬手法や新規研究技術への展開が期待されます。

Yamada W. et al. (2024) Targeted Protein Degradation in the Mitochondrial Matrix and Its Application to Chemical Control of Mitochondrial Morphology. *Chemical Science*
DOI: 10.1039/d4sc03145h

生きた細胞内のタンパク質シグナルを光と特殊な分子で自在に操作する技術
～マイトファジーの分子機構の理解に貢献～

細胞内現象は、タンパク質などの生体分子の局在や分子間相互作用によって、時空間的に制御されています。そのため、細胞内タンパク質の局在を人為的に制御する技術は、タンパク質の生理機能を理解する有効な手段の一つです。本研究では、異なる波長の光を交互に照射することで、タンパク質の細胞内局在を迅速・可逆的・定量的に制御できる「フォトクロミックCID法」を開発しました。本手法を用いて、リン酸化酵素PINK1の局在制御によるマイトファジーの光誘導に成功しました。今後、様々なタンパク質局在の光制御を通して、生命現象やがん・神経変性疾患などの発症機構を分子レベルで理解するための強力な手段となることが期待されます。

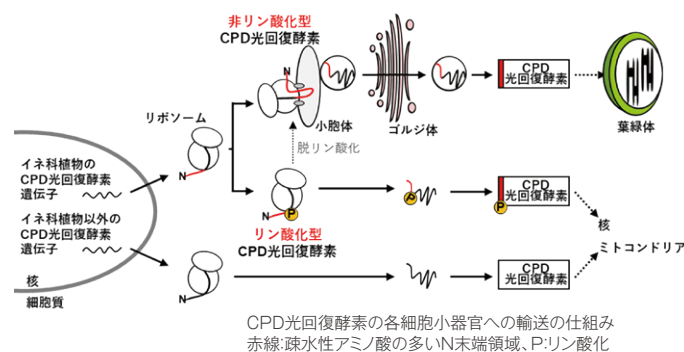


Mashita T. et al. (2024) Quantitative control of subcellular protein localization with a photochromic dimerizer. *Nature Chemical Biology*
DOI: 10.1038/s41589-024-01654-w

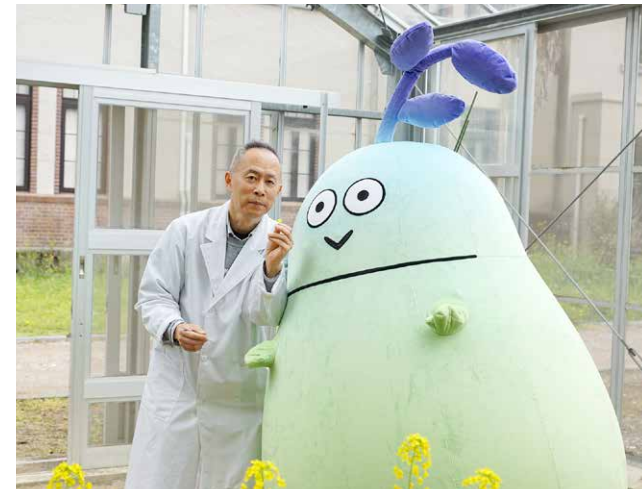
イネ科植物が太陽紫外線の下で生き抜くために独自に獲得した仕組みを解明

CPD光回復酵素は、太陽光に含まれる紫外線B(UV-B)による障害の中でも特に、植物の生育に最も悪影響を及ぼすDNA損傷を修復するタンパク質です。イネでは核、ミトコンドリア、そして葉緑体に輸送され、機能しています。本研究では、イネにおけるCPD光回復酵素の葉緑体への標的配列並びに各細胞小器官への輸送調節の仕組みを明らかにしました。さらに、イネ科植物以外の維管束植物は、CPD光回復酵素を葉緑体に輸送せず、DNA修復を行う仕組みを有していないことを発見しました。本研究結果より、進化の過程でイネ科植物が、太陽光の下で生存するために、CPD光回復酵素を葉緑体に輸送する仕組みを適応戦略の一つとして独自に獲得したことが示唆されました。

Otake M. et al. (2024) Poaceae plants transfer cyclobutane pyrimidine dimer photolyase to chloroplasts for ultraviolet-B resistance. *Plant Physiology*.
DOI: 10.1093/plphys/kiae060



研究・教育・行事

植物生殖システム分野の渡辺正夫教授が
Youtube研一ちゃんねる「東北大学たんけんたい」に出演しました

出演時の様子

渡辺正夫教授がYoutube研一ちゃんねる「東北大学たんけんたい」に出演されました。渡辺教授と、東北大学広報キャラクター「研一」の共演は、Podcast番組「東北大学の研究第一」第3回「自分と他人を見分ける仕組みがカギ? 育種と食糧問題」に引き続いて2回目の共演となります。「東北大学たんけんたい」では研一と実験植物を生育している温室にて共演し、研究についてお話されました。渡辺先生ご出演の回の「東北大学たんけんたい」は下記QRコードより視聴いただけます。ぜひご視聴ください。



生命科学交流ミーティング

生命科学交流ミーティングは東北大学大学院生命科学研究科に所属する組織で、生命科学研究科ダイバーシティ推進委員会のご支援のもと、様々な研究室から集った大学院生によって運営されています。生命科学研究科における研究室間の交流や共同研究の促進を目的とし、特に若手研究者同士のコミュニケーションの場を定期的に提供しています。昨年度、新たな試みとして、交流ミーティング初の「ポスターセッション」を行い、学部生から博士学生・助教まで多くの発表者、参加者で会場は超満員となりました(写真1)。立食形式、飛び入り参加OK、予定発表OK、参加者の投票による優秀発表賞ありなど、正式な学会や研究会とは一味も二味も違うフランクな雰囲気で開催されました。研究に関する議論を異分野間で行うという研究者にとっては貴重な機会を提供できたのではないかと思います。今年度も若手研究者の活発な議論のため、ポスターセッションを行い無事に会を終えることができました。研究活動をしていれば時折訪れる、「飛躍した研究トーク」は研究者にとって、この業界に思い切って飛び込んだ時のワクワクを思い起こさせ、恋のようなドキドキ感を与えてくれると考えています。そんな感情の高ぶりは、研究に対する新たな着想や活力を得る絶好の機会になるはず。そんな体験ができる空間を提供していくため尽力してまいります。さてそんな交流ミーティングですが、絶賛参加者を募集しております。参加希望の方、まずは気軽にご連絡ください。

生命科学交流ミーティング 代表 小野寺諒馬



写真1

Life Science Seminar
生命科学交流ミーティング

運営委員
大募集

生命科学交流ミーティング代表
小野寺諒馬
連絡先
onodera.ryoma.g1@dc.tohoku.ac.jp
詳しくはこちら

研究・教育・行事

経塚淳子特任教授が日本育種学会賞を受賞しました

植物発生分野の経塚淳子特任教授が日本育種学会賞を受賞しました。日本育種学会賞は、日本育種学会の会員あるいは会員を主体とするグループによる優れた学術的あるいは技術的業績に対してその功績を顕彰する賞です。

2025年3月20日から21日に東北大学で開催された日本育種学会第147回講演会にて、受賞式と学会賞受賞記念講演が行われました。

受賞題目：
イネの発生と形態形成に関する研究



おコメはイネの穂から収穫されます。それぞれの穂にコメができるパターンは遺伝的に決まっています。そこに関わる遺伝子群や、パターン形成の仕組みを明らかにしました。



日本育種学会賞 受賞式の様子

梶山十和子助教がタカラベルmont ミモザ賞を受賞しました

分子行動分野の梶山十和子助教がタカラベルmont ミモザ賞を受賞しました。タカラベルmont ミモザ賞は、株式会社リバネスが運営する「科学技術の発展と地球貢献を実現する」ことを目指す若手研究者の研究助成プログラム「リバネス研究費」において「タカラベルmont ミモザ賞」を設置し、「美と健康」の実現につながるあらゆる研究を対象としている賞です。

【研究テーマ】
「小型魚類の種間比較による求愛行動の神経基盤の解明」



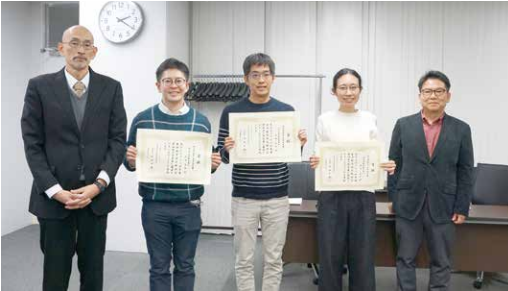
令和6年度 生命科学研究科奨励賞（研究科内 Grant）

本研究科では、基礎研究の支援と若手研究者の飛躍を助力することを目的に、生命科学研究科奨励賞（研究科内 Grant 制度）を平成16年度より実施しています。令和6年度の受賞者名、所属、研究課題は以下の通りです。

【若手研究者】
朽津 芳彦 博士（脳生命統御科学専攻・細胞小器官疾患学分野・助教）
「リソソームミクロオートファジー破綻に起因する疾患の同定」

岸田 康平 博士（分子化学生物学専攻・微生物遺伝進化分野・助教）
「接合伝達による細菌細胞間DNA輸送メカニズムの解明」

梶山 十和子 博士（脳生命統御科学専攻・分子行動分野・助教）
「小型魚類における種特異的な求愛行動の神経基盤の解明」



令和6（2024）年度 教職員受賞一覧

分野名	氏名 職位	受賞名	受賞年月
細胞小器官疾患学分野	朽津 芳彦 博士研究員	第 90 回 日本生化学東北支部例会・シンポジウム 優秀論文賞	2024年 6月
分光機能可視化分野	藤原 孝彰 助教	第 24 回 日本蛋白質科学会年会 若手奨励賞	2024年 6月
構造メカニズム研究開発分野	米倉 功治 教授	第 69 回 瀬藤賞（日本顕微鏡学会賞）	2024年 6月
マクロ生態分野	エバートン・ミランダ 助教	最も多く引用された出版論文トップ 10、動物保護ジャーナル	2024年 7月
生命構造化学分野	梅原 厚志 助教	日本薬学会 東北支部奨励賞	2024年10月
分光機能可視化分野	南後 恵理子 教授	第 41 回（2024 年度）井上學術賞	2024年12月
腫瘍生物学分野	方 震宙 助教	令和 6 年度 東北医学会奨学賞（A）	2025年 1月
応用生命分子解析分野	田中 良和 教授	令和 6 年度 仙台市理科特別授業に対する「感謝状」	2025年 2月
植物生殖システム分野	渡辺 正夫 教授	令和 6 年度 仙台市理科特別授業に対する「感謝状」	2025年 2月
植物発生分野	経塚 淳子 教授	日本育種学会賞	2025年 3月
植物進化多様性分野	伊東 拓朗 助教	日本植物分類学会 奨励賞	2025年 3月
分子行動分野	梶山 十和子 助教	理化学研究所 桜舞賞	2025年 3月
構造メカニズム研究開発分野	米倉 功治 教授	理化学研究所 栄峰賞	2025年 3月
生態系機能分野	陀安 一郎 客員教授	第 23 回 日本生態学会賞	2025年 3月

令和6（2024）年度 学生受賞一覧

分野名	氏名	受賞名	受賞年月
微生物遺伝進化分野	松添 華子	環境バイオテクノロジー学会 2024 年大会 優秀ポスター賞	2024年 5月
応用生命分子解析分野	後藤 楓	2024 年度 韓国蛋白質科学会&日本蛋白質科学会 合同会議 Best Poster Award	2024年 6月
生体分子ダイナミクス分野	渡部 マイ	2024 年度 韓国蛋白質科学会&日本蛋白質科学会 合同会議 Best Poster Award	2024年 6月
生体分子ダイナミクス分野	倉持 円来	2024 年度 日本蛋白質科学会ポスター賞	2024年 6月
脳機能発達分野	藤林 瑞季	日本神経科学会 JNS-SfN Exchange Travel Award	2024年 6月
分子行動分野	上田 龍太郎	Flash Talk Award, EUROEVODEVO 2024 Fish Satellite in Helsinki, 2024	2024年 6月
細胞小器官疾患学分野	見目 悠	日本細胞生物学会 細胞生物学会若手優秀発表賞	2024年 7月
組織形成分野	大島 綾笑	日本細胞生物学会 細胞生物学会学生優秀ポスター発表賞	2024年 7月
分子細胞生物分野	喜田 拓音	日本細胞生物学会 細胞生物学会学生優秀ポスター発表賞	2024年 7月
脳機能発達分野	戸波 凌	NEURO2024 ジュニア研究者ポスター賞	2024年 7月
発生ダイナミクス分野	上床 直紀	線虫研究の未来を創る会 2024 ポスター賞	2024年 8月
進化ゲノミクス分野	荒井 颯太	日本鳥学会 2024 年度大会 ポスター賞 次点	2024年 9月
植物分子適応生理分野	陳 曦	日本宇宙生物科学会第 38 回大会 最優秀発表賞	2024年 9月
分子行動分野	加賀 ひかり	第 46 回 日本比較生理生化学会 名古屋大会 大会委員長賞	2024年 9月
分子行動分野	山口 杏菜	第 38 回 日本行動神経内分泌研究会 最優秀発表賞	2024年 9月
細胞小器官疾患学分野	東海林 紬	第 97 回 日本生化学会 若手優秀賞	2024年11月
細胞小器官疾患学分野	小出 頌悟	第 97 回 日本生化学会 若手優秀賞	2024年11月
環境応答分野	卯 博源	東北植物学会第 14 回大会優秀発表賞（ポスター発表の部）	2024年12月
生体分子機能制御分野	Muhammad Wildan Saifudin	2024 年度 多元物質科学研究所 所長賞	2024年12月
生体分子機能制御分野	馬場 好花	第 19 回（2024 年度）【旗野奨学基金】多元物質科学研究 奨励賞	2024年12月
生体分子ダイナミクス分野	渡部 マイ	2024 年度 生物物理北海道東北支部会口頭発表賞	2025年 2月
膜輸送機構解析分野	平城 柊	2024 年度 青葉理学振興会賞	2025年 3月
植物生殖システム分野	原田 友利香	日本植物生理学会 PCP ポスター賞	2025年 3月
機能生態分野	山川 真広	第 72 回 日本生態学会大会ポスター賞 優秀賞	2025年 3月
機能生態分野	鈴木 桂実	第 72 回 日本生態学会大会ポスター賞 優秀賞	2025年 3月
機能生態分野	城崎 菜乃	第 72 回 日本生態学会大会ポスター賞 優秀賞	2025年 3月
細胞小器官疾患学分野	見目 悠	東北大学 総長賞	2025年 3月
脳機能発達分野	藤林 瑞季	東北大学 生命科学研究科長賞	2025年 3月
膜輸送機構解析分野	平城 柊	東北大学 生命科学研究科長賞	2025年 3月
共生ゲノミクス分野	中野 佑太	東北大学 生命科学研究科長賞	2025年 3月
応用生命分子解析分野	佐藤 恭平	東北大学 生命科学研究科長賞	2025年 3月
植物分子適応生理分野	大竹 桃	東北大学 生命科学研究科長賞	2025年 3月

新任教員紹介

分子化学生物学専攻
階層的構造ダイナミクス講座

南後 恵理子

分子機能可視化分野
教授
(2024年4月着任)



脳生命統御科学専攻

小笠原 康悦

免疫生物学分野
教授
(2024年9月着任)



生態発生適応科学専攻

佐野 勝宏

人類進化学分野
教授
(2024年9月着任)



分子化学生物学専攻
階層的構造ダイナミクス講座

藤原 孝彰

分子機能可視化分野
助教
(2024年4月着任)



分子化学生物学専攻
階層的構造ダイナミクス講座

田口 真彦

分子機能可視化分野
助教
(2024年4月着任)



脳生命統御科学専攻
細胞ネットワーク講座

朽津 芳彦

細胞小器官疾患学分野
助教
(2024年8月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

宇野 裕美

流域生態分野
准教授
(2024年4月着任)



脳生命統御科学専攻
細胞ネットワーク講座

岸本 拓磨

細胞小器官疾患学分野
特任准教授
(2024年8月着任)



脳生命統御科学専攻
神経ネットワーク講座

渡邊 秀典

脳神経システム分野
特任講師
(2024年10月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

FAULKS LEANNE KAY

流域生態分野
助教
(2024年11月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

小林 知里

統合生態分野
特任助教
(2024年11月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

SIOUD IMANE

統合生態分野
助教
(2024年12月着任)



脳生命統御科学専攻
細胞ネットワーク講座

田原 浩昭

発生ダイナミクス分野
特任講師
(2024年10月着任)



脳生命統御科学専攻
神経ネットワーク講座

木村 慧

脳神経システム分野
助教(兼)
(2024年4月着任)



脳生命統御科学専攻
細胞ネットワーク講座

笠原 敦子

膜輸送機構解析分野
助教
(2024年4月着任)



分子化学生物学専攻
階層的構造ダイナミクス講座

IRA NOVIANTI

生体分子機能制御分野
助教
(2024年12月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

加藤 三步

統合生態分野
特任助教
(2025年1月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

竹重 志織

マクロ生態分野
助教
(2025年3月着任)



生態発生適応科学専攻
生態ダイナミクス講座

ABDELA ARGEN ADEM

共生ゲノミクス分野
助教
(2024年4月着任)



分子化学生物学専攻
分子ネットワーク講座

林 真妃

植物生殖システム分野
助教
(2024年4月着任)



分子化学生物学専攻
分子ネットワーク講座

別所 学

進化ゲノミクス分野
助教(兼)
(2024年4月着任)

